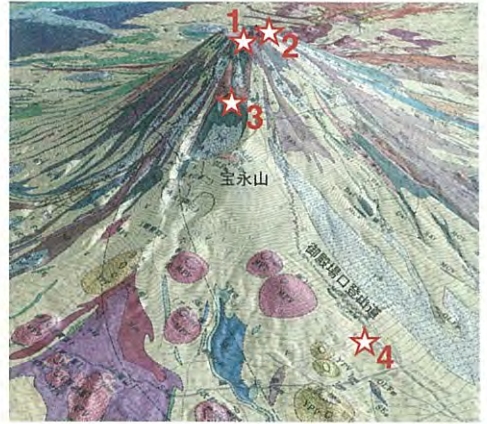


# 富士山の地質見学案内

＜石塚 吉浩・中野 俊・高田 亮・須藤 茂＞

富士山はその火山活動の様子を、現場に様々な証拠として残してくれています。ただし、その現場には必ずしも案内板や解説書が置いてあるわけではありません。解釈、解説は各観察者に任せられます。ここでは、これまでの調査で見た典型的な露頭などを紹介し、その作業の御手伝いをしたいと思います。各写真の撮影位置は、富士山立体地質図上に示してあります。この図は中野 俊・石塚吉浩編(2002):富士火山地質図CD-ROM版、数値地質図G-9、地質調査総合センター、より引用しました。



## 1. 山頂火口壁

手前、石碑の右が銀明水、奥に最高点剣ヶ峰が見えます。その間に、傾斜した地層が見えます。ここには、剣ヶ峰、三島岳、銀明水、などのユニットが層状に堆積しています。それらは山頂噴火が活発であった3000-2200年前頃の噴出物です。写真：石塚吉浩。





## 2. 火山弾

火口の周囲には、きれいな形をした岩塊がみられます。この山頂火口のまわりの御鉢巡り登山道に横たわる火山弾は、まだ固まりきっていないマグマの破片が弾道軌道を描いて火口から吹き飛ばされ、着地時にはつぶれない程度に固まっていたものと推定されます。国立公園内の岩石は御持ち帰りできませんので念のため、写真：須藤 茂。



## 3. 岩脈

1707年の爆発的噴火により山体が吹き飛ばされたために、宝永火口壁では山体内部の様子を見ることができます。この、山頂から南東の方向では、過去に割れ目噴火を起こしたであろうマグマの通り道が、多くの岩脈として残っているのがわかります。岩脈の幅は1m程度です。写真：須藤 茂。





#### 4. 宝永火口とその噴出物

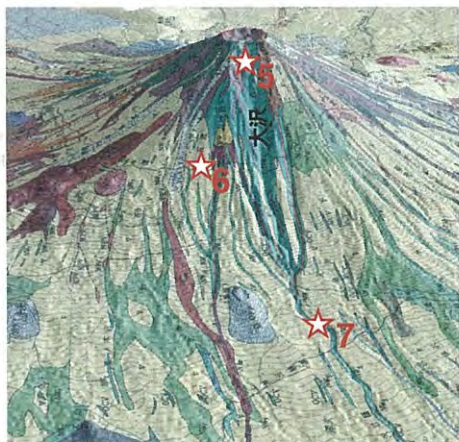
写真奥に見える白い山のうち、右が富士山本体、左が宝永山です。その間に見える宝永火口からの1707年の噴火では、最初に白っぽい軽石が、次いで黒いスコリアが噴出しました。写真右にその堆積物がみられます。この露頭では、初生的な降下火砕物だけでなく、雪崩で崩れてきた堆積物なども複雑にたまっています。写真：須藤 茂。



#### 5. 溶岩流などの重なり

山体内部の構造は、深く削りこまれた谷で見ることができます。西斜面の大沢崩れの上流右岸では、溶岩流や、爆発的噴火で放出され、着地後にまた一体になって流動した溶結スパターなどが重なって成層構造を作っています。写真：石塚吉浩。





**6. スコリア層の下敷きになった炭化木片**

植物が繁っていたところに溶岩や火砕物がたまると、植物は炭になります。後の世にその炭素同位体を測定することによって年代が推定できます。この御中道脇の焼野スコリア層の下の炭化木片の年代測定により、この活動が1300年前頃に起きたことがわかりました。写真：石塚吉浩。

**新富士新期火砕流 3**

**新富士新期火砕流 2  
が再堆積した土石流**

**大沢降下スコリア**

**新富士新期火砕流 1  
が再堆積した土石流**

**新富士新期火砕流 1**



**7. 火砕流堆積物と土石流堆積物**

富士山の中腹から山麓にかけては、山体の上部に堆積した高温の火砕物が、堆積直後に崩れて流れた火砕流や、そうでない低温状態の岩塊などが流れた土石流堆積物が積み重なっています。火砕流の噴出年代は約3000年前です。固結していない堆積物は、さらに削られて運搬され、下流域に災害を及ぼすこともあります。写真：高田 亮。